



ある集い■ 六甲アイランドWFOAPチーム

4年ほど前の12月頃、「野外展をしたい」「どこで?」「六甲アイランドマリンパーク」「いつ?」「毎年、同時期に」「費用は?」「ない。しかし多くの人に現代美術を楽しんでほしい」。このように少年のような瞳の輝きにつられて集まって出来たのが「六甲アイランドWFOAPチーム」です。

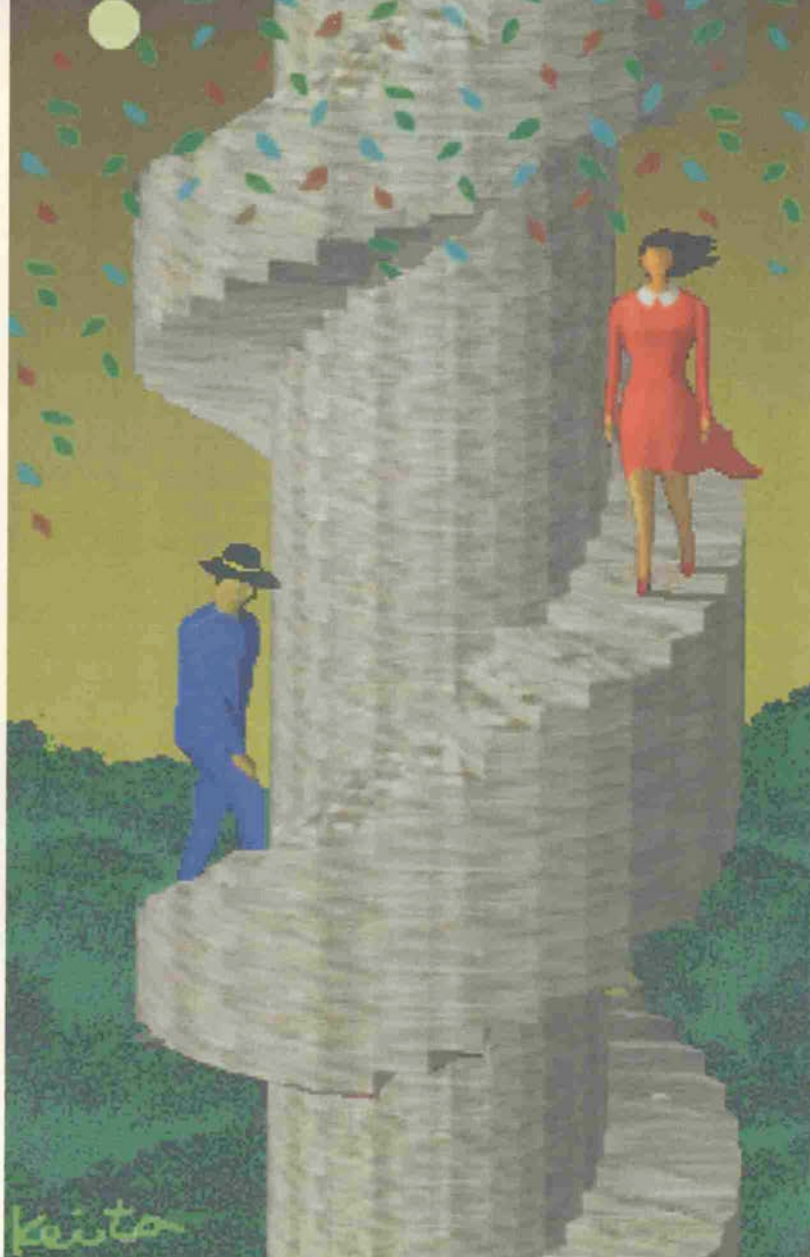
チームのメンバーの活躍している分野はそれぞれ違っていますが、現代美術が好きで、好奇心とロマンがいっぱいであることは共通しています。最初の展覧会のタイトル「六甲アイランドWATER FRONT OPEN AIR PLAY」をそのまま会の名称にし、そこには常に新しいものを造り出していくという意味が含まれています。

もちろん色々な所で、色々な形の現代美術展を仕掛けていくのがチームの仕事です。仕掛人たちは多忙な人たちなので、なかなか一同に集まって話し合う機会がないのですが、ユニークなアイデアを出し合いながら企画を進めています。展覧会の企画が毎回新しい展開をしているのはそれは仕掛人たちの仕事です。

現代美術展を支えているのは表舞台に立っている出品作家であることは当然ですが、スタッフ以外の多くの助っ人に依ることを忘れてはいけません。私たち仕掛人は本誌限りで決して表に出ることもないでしょう。どこかで現代美術展の噂が流れたら、それはたぶん仕掛人の仕事かもしれません。

■連絡先 みよし アートブランニング
代表 宮崎みよし 事務局 神戸市北区鈴
蘭台北町9丁目12・4中西総合ガーデニビル
電話0778(591)5946

FAX 0778(591)5910



これは神戸を愛する人々の雑誌です
あなたのくらしに楽しい夢をおくる
神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ
これは神戸っ子の心の手帖です

10月号目次 ●1996-425

表紙／「コートを着た人形」小磯良平（神戸市立小磯記念美術館蔵）
セカンドカバー／女のいる風景 石阪春生
目次CG／高澤圭多

■神戸100年映画特集

- 27 私の意見／「映画はもう一つの学校」中村茂隆
- 30 浅井信雄対談シリーズ
「神戸100年映画祭で文化的復興を」ゲスト＝高野悦子
- 38 「震災体験を正の遺産に」因幡新平
イベントガイド
- 39 チケットプレゼント&会場マップ

■神戸ファッションフェスティバル特集

- 42 インタビュー／「ヌーベル神戸をテーマに活気を」田崎俊作

- 12 神戸っ子'96／寺門孝之 石原睦美
- 14 神戸のお嬢さん
- 16 ある集い／「六甲アイランドWFADチーム」
- 19 コウベスナップ／「オリックス・ブルーウェーブV2」
- 25 ポエム・ド・コウベ／「秋の歌」由良佐知子 絵＝石阪春生
- 28 連載エッセイ／酔眠流旅日記⑦「横須賀線の贅沢」
村松友視 絵＝瀧本唯人
- 36 地域文化論／「演劇の新開地」米花稔
- 50 もうさんのひょうごウォーク／「ふれあいフェスティバル'96」
- 52 トアロードまちづくり／「中山岩太写真展より」呉宏明
- 55 KOBEMまちづくり／「よみがえる旧居留地」
- 56 対談／「タカラヅカと空間」／酒井澄夫 朝倉摂
- 70 亀井一成のズームインZOO／「まんだらお尻のコアラちゃん」
- 76 神戸を福祉の街に／「おとしよりにやさしい住まいとは」橋本明
- 78 有馬歳時記／女将訪問「池之坊満月城・久武孝子さん」
- 80 世界のこんな美術館／「ヴィーゲラン美術館」伊藤誠
- 82 イベント情報&プレゼント／「もだかる」
- 84 シネマ試写室／「ケロック博士」淀川長治
- 86 神戸百店会だより
- 88 ぴっと・いん
- 90 ポケットジャーナル
- 94 るばっせい／「AM神戸新社屋」三条杜夫
- 98 連載小説／「ブルー・ランデヴー」① 木村光理 絵＝森澤達夫
- 101 神戸っ子倶楽部／「まり暹コンサートご招待」
- 114 海 船 港／「第10回メリケン地蔵盆」かどもとみのる
- 116 北野マップ／「北野のジャズメンたち」
- 118 美の扉／「光の秋」榎本靖子

カメラ／米田定蔵・池田年夫・松原卓也・森田篤志・森田純三・米田英男

◆メッセージ／神戸復興への一提案◆

街と住まいの

早期復興にむけて

住宅・都市整備公団 震災復興事業本部



東部新都心 日出町地区の完成予想図

住都公団では、被災地域の早期復興を目指して、国・地方公共団体をはじめ地元の皆さんと手を携えながら①復興住宅を中心とした住宅の建設②市街地再開発事業③土地区画整理事業の三つの柱を中心に、民間賃貸住宅の建設促進、共同・協調建替えや被災民間マンションの建替え支援などさまざまな震災復興関連事業を推進しています。

特に住宅については、ひょうご住宅復興三カ年計画に基づき、平成七年度から平成九年度の三カ年間で公団は一万八千戸を建設する予定です。そのうち神戸市では一万二千九百戸を計画しています。

土地区画整理事業では、震災復興の最重要プロジェクトとして位置づけされている東部新都心地区の臨海部（七十五ha）で、神戸市から土地区画整理事業の業務を受託して基盤整備を行っています。この地区で公団は、従前居住者用公団賃貸住宅と県・市から要請を受けて災害公営住宅など合計約四千百戸の全ての住宅を建設します。

市街地再開発事業では、JR住吉駅東地区で事業を推進しています。このほか、組合施行の新開地六丁目東地区の市街地再開発事業への参画が決定しています。

そのほか、震災被害の大きかった密集市街地の共同建替え事業として、長田区内の大道御船通地区ほか二地区で住宅を再建しています。

公団では、震災からの単なる復興ではなく、次世代につながる安全で、快適な街と住まいの早期実現に向けて、皆さんの期待に応えられるよう、震災復興関連事業を推進してまいります。



ガッツポーズ！ イチローいわく「22年の生涯で初めて」

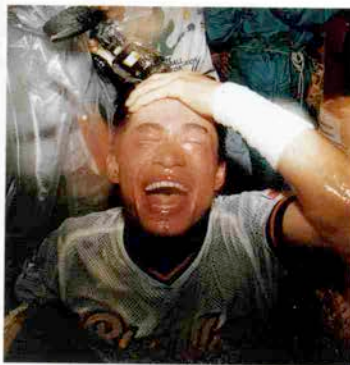


「やったー！」 優勝の瞬間、ハーバーランドで

写真提供
デイリースポーツ

オリックス・ブルーウェーブ V2

Dream Together がんばろう神戸



いい湯(?)だな、ハハハン。
祝賀パーティーで

KOBE スナッパ



9月23日、地元・神戸で仰木監督が初めて宙に舞った

第10・11回神戸景観・ポイント賞 特別賞受賞

まちの周辺の景観と調和しながら個性を光らせ、地域の景観をリードするなど景観形成に大きく貢献した建築物を表彰する「神戸景観・ポイント賞」。震災による高架下の店舗の再建時に、トアロードのファサードを全面ガラス張りとし、ショーウィンドー化することにより、ガード下の通りを明るく開放的に演出しているとして、クイン靴店が「特別賞」を受賞しました。

受賞の挨拶

このたび景観・ポイント賞特別賞をいただき大変光栄に思っております。これからも神戸の風景に少しでも明るさをもたらすことができるようスタッフ一同がんばりますので、皆様のご支援を賜わりますようお願い申し上げます。

クイン靴店スタッフ一同



KOBE SANNOMIYA TOR ROAD
趣味とおしゃれの店クイン靴店

KOBE SANNOMIYA TOA-ROAD
Queen

クイン本店 神戸市中央区北長狭通2丁目30-69 TEL 078-391-2511
ニュークイン 神戸市中央区北長狭通2丁目30-68 TEL 078-331-3510
紳士クイン 神戸市中央区北長狭通2丁目30-69 TEL 078-331-3510



神戸復興
フラワーチャリティ

谷村晃甫 その花の世界

「復興、命あるかぎり」

日本橋三越本店で開催

神戸市立博物館に緞帳を寄贈



華やいだ日本橋三越本店1階中央ホール



「5時46分、時を止めて」を熱唱する上月晃さん



ゆりかご会のコーラスが流れるなか、花を活ける谷村晃甫さん（中央）



あいさつする三輪神戸市立博物館副館長

谷村晃甫

（末生流玉光家元・華アカデミー学院長）

花人としての出発の地、神戸

この度、九月十四日から十六日までの三日間、東京・日本橋三越本店の一階中央ホール・天女の間で、花人・谷村晃甫「その花の世界」を大勢の人々にご披露いたしました。この機会を阪神大震災への鎮魂にと心に決め、フラワーチャリティショー「復興、命あるかぎり」とさせていただきます。

その成果として、市民に親しまれてきた神戸市立博物館地下ホールの震災で破損した緞帳と備品の一部を寄贈できたことは、ほんとうにうれしい限りです。

神戸は、花人としての私の出発の地です。ささやかではありますが、私を育ててくださった神戸へのご恩返しが少しはできたと思っております。

このチャリティショーには、五万人ほどのみなさまから多大なお力添えを賜りました。

会場には、初日は音羽ゆりかご会のかわいいお嬢さんたちのコーラス。二日目には神崎愛さんのフルート。最終日は上月晃さんのシャンソンと、連日、私のパフォーマンスを守り立てていただきました。

殊に上月さんのラストソング「5時46分、時を止めて」の熱唱は、関係者はもちろんのこと、会場につめかけてくださった人々の心を揺り動かし、大きな感銘を胸に刻みつけていただいたことを神戸のみならずにご報告いたします。



KOBE EXCELLENT FASHION

BOUTIQUE
Omura

ブティックサロンボルボが場所も変わり、装いも新たにブティックオームラ本店として神戸・元町にリフレッシュオープンしました。エレガントな装いからカジュアルまで、満足いただける商品を揃えて、皆様のお越しをお待ちしています。



ゴールドをイメージしたゴージャスなブティックオームラボルボ店。金庫の中のディスプレイもお楽しみください。



シルバーをイメージしたブティックオームラ ビアンコ・ドンナ店。カジュアルヤングミセスに人気です。

〒650 神戸市中央区元町通3-2-18

ブティックオームラ

ボルボ店

TEL.078(391)0014

ビアンコ・ドンナ店 TEL.078(391)4601

カメラ・米田定蔵

KOBE EXCELLENT SHOP

★婦人帽子

maxim
マキシム

神戸市中央区北長狭通2丁目6-13 ☎331-6711

(トアロード)

全国有名百貨店婦人帽子売場

★神戸唯一のボルボネーゼトータルブティック

BOUTIQUE
Omura

神戸市中央区元町通3-2-18

ボルボ店 ☎078(391)0014

ビアンコ・ドンナ店 ☎078(391)4601

★伝わる真ごころ最高の風格

金 柴田音吉洋服店

神戸市中央区元町通3丁目1-17 ☎334-2250

★よろず御機衣縫上處

神戸シヤリ

神戸市中央区三宮町3丁目1-6 ☎331-2168

★選りすぐった一点を…

Sanohe

神戸市中央区元町通2丁目5-7 ☎331-4707

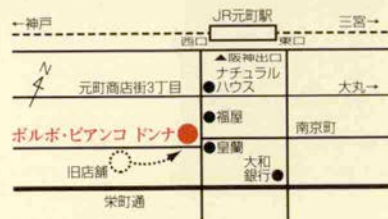


LIZA

神戸市中央区三宮町2丁目6-1 ☎391-6806

※このシリーズは上記の専門店の提供によるものです。

9月11日
REFRESH
OPEN!



友がいて
笑顔が輝く
キャンパスライフ

平成9年度 学生募集要項

神戸女子大学

文学部 550名
家政学部 200名

学科名	一般試験科目
文学部、社会福祉学科	●英語Ⅰ・Ⅱ ●国語Ⅰ・Ⅱ(漢文除く)
史学科	●英語Ⅰ・Ⅱ ●国語Ⅰ・Ⅱ(漢文除く)、日本史B、 世界史Bの中から1科目選択
教育学部 家政学部 管理栄養士	●英語Ⅰ・Ⅱ ●国語Ⅰ・Ⅱ(漢文除く)、数学Ⅰ(確率・ 個数の処理除く)・Ⅱ、物理ⅠB、化学ⅠB、 生物ⅠBから1科目選択

*推薦選考 調査書・小論文・面接

入試	出願期間	試験日
推薦	10.28(月)～11.5(火)	11.9(土) 全学科
一般A	1.20(月)～1.31(金)	2.8(土) 文学・史学 社会福祉 2.9(日) 教育・家政 管理栄養
一般B	2.17(月)～2.25(火)	3.3(月) 全学科

◎資格 その他

教育免許状(幼1・小1・中1・高1)
栄養士免許証・管理栄養士1次試験免除
社会福祉士受験資格
〒654 神戸市須磨区東須磨青山2-1
TEL.(078)731-4416

神戸女子短期大学

総合生活学科 350名
食物栄養学科 200名
初等教育学科 80名

受験科目	●英語Ⅰ・Ⅱ ●国語Ⅰ・Ⅱ(漢文除く)、数学Ⅰ(確率・個数の処理除く)・Ⅱ、化学ⅠB、生物ⅠBの中から1科目選択 (全学科)
------	--

*推薦選考 調査書・面接・小論文

入試	出願期間	試験日
推薦	10.28(月)～11.5(火)	11.10(日) 全学科
一般A	1.20(月)～1.31(金)	2.10(月) 初等教育 食物栄養 2.11(火) 総合生活
一般B	2.17(月)～2.25(火)	3.4(月) 全学科

◎資格 その他

教員免許状(幼2・小2・中2)栄養士免許証
〒650 神戸市中央区港島中町4-7-2
TEL.(078)303-4700

神戸女子大学瀬戸短期大学

〒709-08 岡山県赤松郡瀬戸町観音寺721
TEL.(08695)2-3121



秋の歌

由良佐知子

絵／石阪 春生

コンコン コンコン

みあげた屋根のうえ

青い空を背に

屋根瓦を葺いている人がいる

足を踏ん張って

槌で瓦を叩きながら

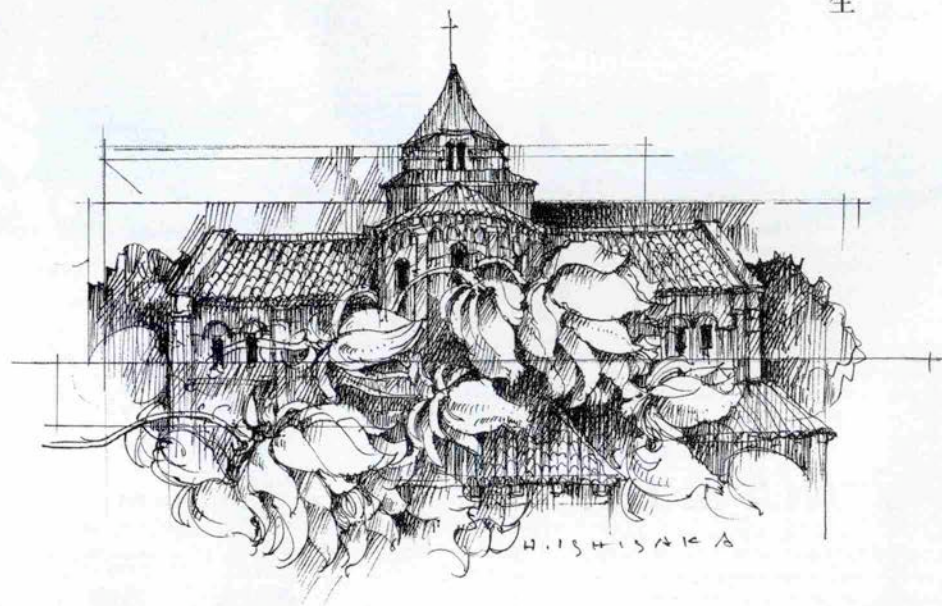
大空にたったひとり

やがて夕闇

誰もいなくなった屋根のうえから

コンコン コンコン

秋がだんだん透けてゆく



DairCake

ペアケーキ

お喜びを伝えるお二人のシルエット
ペアスタイルの贈りもの



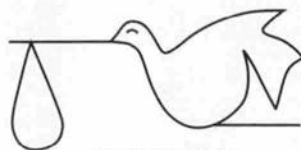
- Aセット クラウンケーキ&バウムクーヘン
- Bセット クラウンケーキ&クッキー
- Cセット クラウンケーキ&アーモンドケーキ
- Dセット バウムクーヘン&クッキー
- Eセット バウムクーヘン&アーモンドケーキ
- Fセット クッキー&アーモンドケーキ



株式
会社

北欧の銘菓
2-人タイム・コンフェクト

本 社 〒651-21 神戸市西区北別府2-1-2
TEL 078-974-9756 FAX 078-974-9758
ブライダルギフト
事業部・大阪 〒558 大阪市住吉区阿田町7丁目12-19
TEL 06-697-9435 FAX 06-697-4188



SAMOTO CLINIC

佐本
産科

ママといっしょに



赤ちゃん：小島卓人くん（平成7年11月5日生まれ）

ババ：学さん ママ：貴代さん

「祖父の名を一字もらい卓人と命名しました。
人に優しく元気な男の子に育ってください。」

★佐本産科・婦人科★

佐本 学

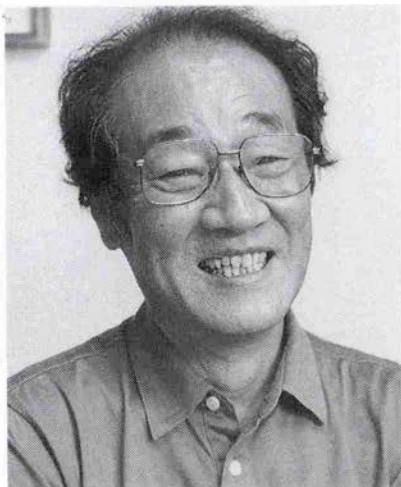
神戸市兵庫区中道通4-1-15
TEL:078-575-1024（病室TEL:078-577-7034）

市バス上沢4停南スグ

●駐車場完備●



神戸100年映画祭



中村 茂隆

淀川長治セレクション20実行委員長
神戸大学名誉教授、作曲家

□私の意見

映画はもう一つの学校

十一月いっぱい、神戸では「神戸100年映画祭」が催される。この期間神戸産業振興センターを中心とした「ヒューマニズム映画祭」、神戸海洋博物館を中心とした「アジアフィルムフェア」、KAVCシアターを中心とした「淀川長治セレクション20」などで、連日名画が上映される他、国の内外から第一線の映画作家たちが集まり、国際的リレートークなどが行われる。

私が関わった「淀川長治セレクション20」では、六月いっぱい一般の観客から九千通に及ぶ投票が寄せられ（世代的には二、三十代をピークに十代から九十才代まで）、そこから得票数順に百位まで選び、さらにそこから淀川長治さんに二〇作品を選んでいただいた。

「アジアフィルムフェア」では、今世界の映画界で熱い視線を浴びているアジア各国の最新話題作が目白押しに登場する。

昨年一月の阪神・淡路大震災で私達は人間同士のいたわりと励まし、人と社会との関係について改めて見直す必要を痛感させられた。その思いは「ヒューマニズム映画祭」にこめられている。

私は映画好きの父親の影響で、五〇年以上前、戦争末期の小学生時代から映画を観はじめ、高校時代はその魔力にとりつかれ、映画監督を志した時期もあり、それ以後も一人のファンとして映画を観つづけている。

映画は私にとって「もう一つの学校」であり、そこでは学校のように与えられた課題ではなく、自分の力で様々な発見をし、感動する力を身につけた。未知の世界、社会の仕組み、様々な民族の習慣や文化の違い、にもかかわらず登場人物がフと見せる表情から、その思いのすべてが瞬間にして理解できるという不思議さなど、実におびただしいほどのものを映画から学んできた。それらは今、作曲という私の表現活動の中で十二分に活かされていることを、折りにふれて思い知らされる。

皆さんも、この機会に映画の来し方をふりかえり、その未来について考えてみませんか。

酔眼流旅日記

第7回

横須賀線の贅沢

村松 友視 〈作家〉

かつて、東京の出版社につとめ、文芸雑誌の編集者や文芸出版の担当者になった者にとって、横須賀線に乗って鎌倉文士をたずねるという時間は、一種の特権的な気分を味わう世界だった。鎌倉文士という言葉も今や死語に近く、鎌倉詣でをする文芸編集者はほとんどいなくなってしまったが、ぎりぎりそんな時代の最後にぶら下った私の頭にも、なつかしい記憶としてファイルされている。

鎌倉には、川端康成、大仏次郎、里見弴、今日出海、小林秀雄、永井龍男、高見順、中山義秀、小島政二郎などの作家がいて、文芸編集者は一日に何人かをこなして東京へ帰ることが多かった。私は、一九六九年に発行した文芸誌『海』の編集部に在籍していて、川端康成、小林秀雄、永井龍男氏などのお宅へうかがった。それ以前に中山義秀氏や北鎌倉の高見順氏の家へうかがったこともあったが、『海』発行時にはすでに亡くなられていたのではなかったか。

私は、祖父（村松梢風）が鎌倉文士の一人として西御門に住んでいて、夏休みや冬休みはその家で過ごしたから、鎌倉に対する憧憬はそれほどではなかった。むしろ逆に、祖父とつき合いのあった作家と仕事をするのは、あまりいさぎよくないという気が

していた。しかし、ある時期からそのこだわりが雪解けて、何人かを積極的ににおたずねることになったのだった。川端康成、小林秀雄、永井龍男などの顔を、じかに見定めておきたいという気持ちがあったのではないかという気もする。

鎌倉へ行く横須賀線では、よく他社の編集者と一緒になった。きょうはどちらへ？ などと相手の行先を聞き、そうかあそこはあのあたりをマークしているのかと、お互いに腹を探り合うのみなかなかの気分だった。駅前で別れ、それぞれの方向に分れて目的の作家のお宅への道をたどるのだが、門の前まで来るとやはり緊張した。

鎌倉文士は、すでに文壇の最長老であって、概していかめしく気むずかしい人が多かった。そこへいかに入り込むかがやり甲斐というところだが、平たく言えばやはり怖い存在なのだ。うまく話が弾めばしめたものだが、不首尾のときは落ち込むし、叱られたりした帰りは足どりが重くなる。私は、文士の家を生れたし鎌倉にも馴れていたが、読者の立場からいきなり編集者となり、鎌倉文士の担当になった人などの緊張は、私などからは想像を絶するものであったようだ。

しかし、このような緊張には多少の快感が混って

カット／灘本唯人
題字／筆者



いる。どのみち好きな文学の道へ入った人たちなのだから、叱られるのもまた特権的な体験として味わうというわけで、鎌倉文士と対面しているときの文芸編集者の意識はなかなか複雑なのだ。近ごろのように、解放感のみが快感というセンスが横行してくると、あの屈折した快感がやけになつかしく思い出されるのだ。

そして、文芸編集者は充実感や疲労感を抱いて鎌倉駅へ辿り着く。横須賀線の切符を、帰りだけグリーン車にするのも、文芸編集者独特の感覚だ。ホームの売店でワンカップ大関を一個買い、それをグリーン車の窓の脇へ乗せて発車を待つ。電車が走り出すまでフタを開けないところがミソで、そこまで気持ちを貯めておくのだ。

発車と同時に、おもむろにフタをあけたワンカップ大関を、鎌倉文士との時間を克明に辿りつつ、ゆっくりと口へもってゆく。そして、約一時間の東京駅までのあいだ、ちびり、ちびりとケチくさい飲み方をする。このケチ臭さが文芸編集者独特のセンスであることは当然だ。鎌倉文士の貌、声、言葉、仕種、ごちそうになった酒や肴、奥さんの顔、声、気遣い、庭のけしき、小鳥のさえずり、文士の奥さんに対する物言い……ありとあらゆることを頭によみがえらせながら、一時間かけてワンカップ大関を飲む……こういう至福の時間今いずこ、というお話であります。

〈むらまつ・ともみ〉一九四〇年東京生まれ。慶応義塾大学文学部卒。六三年中央公論社に入社。「小説中央公論」「婦人公論」「海」編集部員を経て、八一年退社。八二年「時代屋の女房」で直木賞受賞。主な著書は「私、プロレスの味方です」「百合子さんは何色」「アブサン物語」「流水まで」など。





(たかの・えつこ) 1929年旧満州(現中国東北部)生まれ。日本女子大学卒業。53年東宝(株)入社。58年パリ高等映画学院監督科に留学、卒業。衣笠貞之助監督の助手、テレビドラマの脚本、演出を経て、68年岩波ホール創立と同時に総支配人に就任。神戸100年映画祭実行委員長。著書に「シネマ人間紀行」「私のシネマライフ」「黒龍江への旅」ほか。

■浅井信雄対談シリーズ〈26〉

神戸100年映画祭で

神戸のまちに文化的復興を

ゲスト

高野 悦子

〈岩波ホール総支配人・神戸100年映画祭実行委員長〉

浅井 信雄

〈神戸市外国語大学教授〉

浅井 高野さんといえば、岩波ホールと切っても切れません。ご苦労もあったでしょうが、羨ましいとも思います。大学で南博先生(社会心理学)のもとで映画を勉強され、それが今日まで、ずっと生きていますから。

高野 そうですね。人生は人と人との出会いだなんて、つくづく思うんですけど、南博先生との出会いもそう

ですね。戦争直後、先生がアメリカからお帰りになって、すぐ教えてくださることになったので、アメリカ的ななど申し上げたらいいか、抽象的な学問ではなくて、非常に役立つ学問を教えてくださいました。その研究が映画が当たるか当たらないかというマーケティングリサーチのような性格をもっていたので、映画会社の先輩の方々



神戸100年映画祭



(あさい・のぶ) 1935年新潟県生まれ。東京外大卒。読売新聞ワシントン支局長など海外勤務十年以上。米国ジョージタウン大客員研究員、三菱総合研究所客員研究員などを経て87年から現職。著書「アメリカ50州を読む地図」「民族世界地図」ほか。横浜市在住。

が「我々が三〇年の経験で得たものを、あなたは二年で身に付けている」とおっしゃったんですね。

浅井 たいへん興味深いお話です。私は国際政治を教えますが、学問のための学問、という教え方もあります。でも、かつてジャーナリストとして世界を飛びまわってきた私は、まず現実の国際政治がどう動くかを具体的に話し、その上で理論的に総括するやり方が好きです。南先生のやり方に共感しますね。

高野 基本的にマスコミュニケーションとしての理論を教えて、それを各メディアで実践しろ、というのが命題でした。私は映画をテーマにいただいたわけですが、そこで、作り手（製作者）、送り内容（映画）、受け手（観客）という三者の関係を勉強するんですね。その三者の関係を、浅草、新宿、渋谷などの劇場で朝から晩まで観客の反応を観察し、リサーチしていったのです。

★「仮の夫」に代わって、神戸100年映画祭実行委員長に

浅井 今回は神戸100年映画祭の実行委員長をなさいま

す。これについて、高野さんのお考えをお聞かせ下さい。
高野 映画誕生百年ということと、映画によって神戸の復興に文化的なものの、精神的な豊かさを取り入れるという大きなテーマを抱えた映画祭ですから、委員長ということですごく戸惑いました。しかし、神戸の皆様が総力をあげてなさるということで。しかも、顧問を務められる淀川長治先生には学生時代からお世話になっていいますから。神戸が、淀川先生の故郷であるということも大きな理由です。

これはジョークなんですけどね、私が還暦のときに、結婚もしないで仕事ばかりしてかわいそうだからと、友人たちが「シネマ君」との架空の結婚式を挙げてくれたんです。私がウェディングドレスを着て登場し、シネマ君代理を淀川先生が演じて下さったのです。ところが先生は突然「皆さん、これは余興ではありません。私と悦子さんはもう随分永い関係で、四十五日前から『もう本当のことを発表しよう』ということになって……」とおっしゃるんですよ。会場も全員一時は本当だろうと、私も何が起るんだろうと立ちすくんでいますとね、「これ



浅井信雄さん

から千葉の小さな旅館で、二人でお風呂にちやぶちやぶと入って、それから朝起きたら物干し台にのぼって、千葉の海を眺めてクジラが来るかどうか、手をつないで見ようと思う」と。ちょうど「八月の鯨」を岩波ホールで上映中で大ヒットしていたときでした。ここで参加者は、だまされたことに気がつき拍手大喝采になりました。

それから、私は「仮の妻」です。「仮の妻」としてしばしば先生から助けていただいておりますので、今回「仮の夫」に代わって委員長を引き受けることは、とても光栄なことで、身の引き締まる思いです。

浅井 映画は娯楽、リクリエーションだとおっしゃっています。リクリエートは再創造する意味で、再創造のエネルギ―を与えるものが映画だと。神戸はまさに再創造のエネルギ―が必要なときです。また、高野さんは映画を社会福祉のジャンルのなかで勉強された。からだに障害のある人だけでなく、健康な人の心のケアも社会福祉です。それを映画を通じて、ということなら、神戸の現状にぴったりです。高野さんこそ実行委員長の最適任者だと思っています。

高野 そう言うてくださると、私も働く勇気が沸いてまいります。今でも南先生のリクリエートすること、映画が福祉としての大きな存在だということが、一生私の頭から離れません。

岩波ホールの上映作品を選択するときに、常に私に拒

否をさせるのは、暴力、戦争、殺人、などが活劇として面白く扱われ賛美されている映画です。

浅井 つまり、高野さんの映画人生の最初に十分納得するものがあつた。それをもち続けておられるのですね。

高野 一番最初の映画観客調査は、当時大評判だった「青い山脈」で、新宿の映画館でいたしました。館内のものすごい熱気にはびっくり仰天しました。入って来るときと出て行くときのお客様の顔がまるで違うんですね。「青い山脈」は戦後の民主主義の理想像を描いたものでした。私自身もこの映画で変わったように思います。映画に対する誇りをもったのも、映画との出会いがよかったのです。

★世界的名作を落ち穂拾い

浅井 高野さんが日本に紹介された映画は、アジア、中東、アフリカ、中南米のものが非常に多いですね。アメリカ映画はあまり見当りません。暴力的な活劇映画はアメリカが一番多いと思うのですが、そのせいでしょうか。

高野 いいえ、そうではありません。私はアメリカ映画も好きですから。メジャーと呼ばれるハリウッド映画の大会社は各々の配給組織を直接日本に持っています。だから強大な力がありますね。私がやったことは、落ち穂拾いです。一九六八年のころは、ちょうど日本映画の状況がよくなくなってきた、ヨーロッパの優れた作品を上映していたATG（アートシアターギルド）も活動を停止し、映画館が激減していくって、年間の総動員人数も十三億のピークから一億五、六千人になってしまった。昔ならば当然上映されていた映画、例えばイタリア映画の代表的な監督、ヴィスコンティやフェリーニ、フランス映画のルノワール、クレール、ヌーベルバーグといわれたトリフォールとかアラン・レネというスター監督の作品も日本で

日の目を見ていないというような状況だったんですね。私が拾って歩いた映画はマイナーな映画ではなくって、アメリカが直接配給する以外の世界的な名作だったんですね。

ですが、誰も上映しないものをといつてるうちに、どんなアジア、アフリカ、ラテンアメリカ、東欧諸国と拡がっていきましてね。

浅井 ますます、落ち穂拾いですね。

高野 そうなんです。それで、ドキュメンタリーまで拡がって、結果的にはよかったなと思っています。

浅井 でも、マイナーな映画といわれるインドは世界最大の映画大国ですが、意外に日本人は知りません。私は、インドに二年間、エジプトにも三年ほど居ました。インドの「大地のうた」やエジプトの「王家の谷」「ナイルのほとりの物語」を上映してくださったときは、実に嬉しかったですね。

高野 メジャー、マイナーという言葉の使い方が、岩波ホール自体はマイナーなんです。二二〇人しか入らないから、小さなホールなんです。上映している映画は実は大きな映画なんです。アフリカの映画を上映すると皆さん、マイナーだといわれますが、何億人ものアフリカの人が見たという映画だったりする。アメリカ映画の観客総動員数より多いかもしれないんです。

岩波ホールが小さかったからこそ、今思えば信じられ

ないような冒険をしてきましたね。

★一〇〇回見ても新しい発見のある映画を上映

浅井 テレビの番組が人気を得て視聴率が高くなつてくると、冒険ができなくなる。例えば神戸にサンテレビという地元のテレビ局がありますが、かなり意欲的な番組を流すこともあります。小さいから思い切つてやれるとか、理想を実現できることがあると聞きます。

高野 ホール開きのときに野上弥生子先生がおっしゃったお言葉も、私にはすごいヒントで、「ひとりの心を打たなくて、何で万人の心を打つことができるでしょう」。私はいつも映画は一〇〇万人、テレビは一〇〇〇万人単位で考えていて、お客様は真っ白で顔がなかった。そのとき、初めてひとりの心を打つことの難しさに気がつきました。今では自分が本当に惚れ込んだ作品、この映画の上映中に、死んでもいいと納得できる映画を選ぶようにしています。

浅井 岩波ホールの映写技師の方が、一〇〇回見ても新しい発見があるような映画を選んでくれとおっしゃったとか。これもいい言葉ですね。

高野 若いころ私は、衣笠貞之助監督や五所平之助監督に、「いい映画を何回も見なさい」といわれていました。手本も先生もいない大昔、バイオニアの監督たちは外国のいい映画を何十回も見て、演出の勉強をなさったのだそうです。だから私も、映写の若者たちに「漫画を読んだり、居眠りしたりしてちゃ駄目よ。よいチャンスだから、よく映画を見て勉強しなさい」と言っただけです。それをちゃんと実行して、例えば「大地のうた」や「大いなる幻影」は一〇〇回見ても発見がある。そんな映画が上映したい」と意見を言うのです。私は上映作品を五回か一〇回ぐらいしか見ていませんから、一〇〇回と言われると返す言葉がない。やっぱり現場の若者の意見を聞くことは大切ですね。



高野悦子さん

浅井 日本映画に元気がないのはなぜでしょうか。

高野 映画はテレビとの戦いのなかで、産業として元気がありませんが、作家個人については、希望をもっています。今や、映画製作は大変な博打になってきました。製作費がかかります。独立プロの低予算の作品でも、軽く一億円を超えます。かつては大映画会社がたぐさんの日本映画を作っていたんですが、そのリスクを負わないでアメリカ映画の興行に偏っているわけです。監督だけではなくスターも、照明、カメラ、大道具、小道具などスタッフも映画会社の中で育ってきた。今はそれを誰も育てないんです。外国と違って日本の国は文化政策として映画に何にもしていない。そういう状況ですから元気がでるはずがない。日本が置かれている経済的な文化的な政治的な状況が、戦後五〇年間どうしてこんなに儲けることのみに、全て走ってしまったのでしょうか。

浅井 アメリカでは身障者の問題など重いテーマの映画が作られて、世界に配給されています。アメリカにはそれができるんですね。日本では単にコストがかかるというだけではなく、内容的に世界に受け入れられる普遍的な映画が作られにくい理由があるんでしょうか。

高野 日本国内で日本の映画のシェアは常に六〇%以上だったのが、ここ二三年で逆転して、アメリカが六五%、日本は三五%になってしまった。ヨーロッパの状況はもっとひどく、ドイツ映画でも十五%になりました。アメリカは第一次、第二次世界大戦で漁夫の利を得たんですね。一九三〇年代は、フランス映画の方が世界的にシェアが多かったというんですから。かつて強力に映画を作っていたドイツ、フランスが戦争のために壊滅して、いろんな優れた作家がアメリカに逃げて行ってしまった。アメリカという国は世界中の国の人が住んでいる。アメリカで通用する映画は誰にでもわかりやすいものでなければならぬ。アメリカでヒットする作品は当然、世界でも通用する性格をもっている。世界中の観客を喜

ばせる方法を研究し尽くしたものがハリウッド映画で、それを作っている人は世界中から集められた才能ですね。それは、戦場にならなかったアメリカだからできるんです。ドルの力もありますが、もうひとつの理由は配給網なんです。流通というものを完全に世界制覇したのが、アメリカなんです。ベルリンの壁が崩壊した後、東欧諸国が資本主義社会に変わりましたが、外貨がなかった。一番最初にアメリカがしたことは、映画館を買収するだった。東欧諸国は外貨を得るために大喜びで映画館を売ったんですね。ハンガリーなどは、気がつくとい九五%がアメリカ資本の映画館だった。そこで上映するのがアメリカ映画で、自国の映画を作っても上映するところが無くなったんです。敗戦後の日本は松竹、東宝、東映、などの大映画会社は直営館をもっていて、製作、配給、興行を独占していました。だから、映画を大量生産して、日本映画の黄金時代を築いた。映画製作が分の悪い産業になったとき、映画館は七〇〇館から二〇〇〇館に激減し、残った映画館は商売のしやすいアメリカ映画の上映に集中したというのが現在の日本です。日本ではまだ映画館は日本資本の配下です。だから最近アメリカは直営館を建設しはじめています。シネマコンプレックスという小さな館が一つのビルの中にいくつもあるという形です。神戸、高岡が成功し、福岡、金沢と作られています。いずれもアメリカ系の映画が上映されています。だから映画館がこれから全国的に相当できますが、日本の独立プロが一生懸命作った地味な映画は上映するところがないという状況は少しも変わりません。このようにアメリカは流通網を独占し、そこへ誰でもわかる楽しい映画を流していくことで世界を制覇しているのです。アメリカの黄金時代といわれた戦後のアメリカ映画は、主にアメリカの観客のために作っていた。今は広く世界のマーケットを考えているので、わかりやすいSFやハイテクを駆使し、どんなゲーム的なものになっ

ています。

★ポルトガルは「親友」

浅井 個人的にも興味があるんですが、高野さんはポルトガル政府から賞をいただけてますね。他の賞については想像がつきますが、ポルトガルと高野さんのつながりがどうもわかりません。

高野 人と人との出会いも偶然な要素があり、不思議だなと思うんですが、国との出会いも同じなんです。中国は父と母が選んだ国で、私はそこで生まれ育ったので、肉親みたいなもので切り捨てることはできません。映画の勉強をしたフランスは私が選んだので恋人のような国ですね。じゃ、ポルトガルはというと、偶然出会って親友になった国なんです。一九六〇年、フランスのセーブルで仕事をしていた私の姉が、ポルトガルのビスタ・アレグレという有名なセラミックの会社の社長さんに招待されました。姉がちょうどコンクールで忙しかったので、私が姉の代わりに二週間、ポルトガルへ行っただけです。そして、すっかりポルトガルが気に入りました。一九六三年「巴里に死す」のテレビドラマのためにパリ

にロケに行きましたが、持っていった十六ミリの生フィルムがたくさん余りました。そんなとき天気のいいポルトガルをを急に思い出したんです。私が留学していたフランスの映画大学イデックにポルトガルの同窓生が七人いたものだから、ストーリーを書き送ってロケ撮影を頼んで帰ってき

たんですね。それが後に映画「鉄砲物語」になるのです。それから、一九六五年、今度は「鉄砲物語」のためにポルトガルにロケに行くことになったんです。一年二カ月滞在しました。もし、最初の訪問のとき太陽がさんさんと照つていなかったら、鰯の塩焼きがあんなにおいしくなかったらとか、何でポルトガルなのか理由はないんです。アクシデントみたいなものです。いまだに日本ポルトガル協会常任理事として深いつながりが続いているんです。

浅井 一九六〇年代というときまだ独裁政治の時代です。あの国で映画を自由に作れるという状況があったんです。ようか。

高野 ポルトガルの友だちに言わせると、当時のポルトガルは非常に遅れた国で、映画は芸術として認められていなかった。映画の影響力を政府は何にも考えていなかったようです。後に大統領になるマリオ・ソウレス氏は反政府運動のかどで投獄されていた。夫人のマリア・パロゾさんは有名な舞台女優。舞台に立つことは禁止されていたんです。政府は舞台は駄目だが、映画ごときはいいだろうと許可したんですね。ふらっと出掛けたポルトガルで一九六〇年初頭にお会いしたのが、ファドの女王アマリア・ロドリゲスさんや、大統領夫人になられたマリア・パロゾさんでした。七四年、花の革命が起きて独裁政権が倒れ、世の中ががらりと変わってしまっただけで、知合いになった方が重要な人物として登場なさってね。

浅井 七九年に管理内閣の首相をつとめたマリア・ピント・タシルゴさんと、岩波書店の雑誌「世界」で対談したことがあります。彼女、七四年の革命後の自由化と民主化を、熱っぽく語っていました。そして、自由のないそれ以前のあの国で、高野さんが映画活動をなぜできたのか不思議だったんです。最後に神戸100年映画祭の成功をお祈りします。(八月二六日、東京・神田の岩波ホールで)

